

ZOCALO 2024 2 ▶ 3

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

現代美術のなかの椅子なるもの

企画展「アブソリュート・チェアーズ」
2024年2月17日(土)~5月12日(日)

—企画展「アブソリュート・チェアーズ」の構想を長年温めてきた建島哲館長に、企画の意図や見どころを聞きました！

建島 埼玉県立近代美術館では開館以来、椅子のコレクションをしてきました。初代館長の本間正義の発想として、国内外のよく知られたデザイン椅子を収蔵して、鑑賞者に実際に座ってもらうことでより身近に体験してもらおうというのがありました。絵や彫刻に触ることはできなくても、椅子だったらできる。そうやって美術館というものを市民社会の中でポピュラーなものにしようとしてきたわけですね。本間さんの思想を受けて、当館では会場内やロビーなどの公共スペースにデザイン椅子を並べて、日常的に座れるようにしています。

椅子というのは、デザインのなかではかなり特権的ですね。もちろん非常に優れたベッドやテーブルといったものはありますが、多くの建築家やデザイナーを惹きつけてきたのは圧倒的に椅子なんです。椅子というのはそれだけ、造形的に見ても機能的に見ても、いろんな人の創意工夫やインスピレーションを誘うものがあると思うんです。じゃあここは美術館だから、美術作品において椅子というモチーフがどのように扱われてきたかを考えてみたいというのがこの企画の大元にありました。デザイン椅子というものに継続的に取り組んできたがゆえに、それをもっと拡大して美術全般の問題として考え直してみたらいいんじゃないかと考えたわけです。

—「アブソリュート・チェア」、つまり「絶対的・究極的な椅子」はどんな椅子だと思いますか？

建島 ハンス・ウェグナーの《ザ・チェア》と呼ばれる椅子があります。機能面においても形態の美しさにおいても、シンボリックに君臨しているのが《ザ・チェア》。これぞ椅子、椅子なるものだと取れますけれども、それがデザインの一つの頂点にある。もう一つ、非常によく知られたシンボリックな椅子は、倉俣史朗の《ミス ブランチ》ではないでしょうか。透明のアクリルの中に造花をちりばめているという、華麗でもあるしショッキングでもある。機能面というよりビジュアル面のインパクトがありますね。

じゃあアートとしてのシンボリックな椅子を考えると、一つは今回の展覧会の出発点でもあるデュシャンの《自転車の車輪》(図1)。これは4脚のスツールの上に自転車の車輪を差し込んだものです。今回展示する作品はシュヴァルツによるレプリカで、オリジナルの作品は失われている。デュシャンには瓶乾燥機や便器のレディメイドもありますが、これもオリジナルは行方不明です。「objet trouvé(発見されたオブジェ)」という言葉がありますが、それは自分で作っていない、日常に存在しているものをアート作品として発見したという意味で言われています。でもデュシャンの場合は「objet perdu(失われたオブジェ)」と称されるべきでしょう、全部なくなってしまっているんだから。僕はその失われてしまったということ自体に意味があると思います。ゴミと間違えられて捨てられたりしているんですけど、そのこと自体が面白いと思う。失われるのはオブジェの宿命であつたんじゃないか。そういう意味ではデュシャンの《自転車の車輪》というのは、残念ながら失われたというより、失われることによってオブジェとして初めて成立したといえるんです。消滅することによって初めて成立した椅子というのが、僕は「アブソリュート・チェア」といえるだろうと思います。

もう一つはウォーホルの《電気椅子》(図2)。ウォーホルのこの前後の作品を、僕は「死の形而上学」と言っています。自動車事故、飛び降り自殺、飛行機事故などを題材に、ウォーホルは死にまつわる思索を重ねていくわけですが、その中の頂点のようにして電気椅子がある。実際に死刑に使われた椅子の写真をそのまま利用してシルクスクリーンで刷った作品です。椅子というのは、休息や安楽の場所であつたり、仕事をする場所であつたりするけれども、それと同時に拷問の道具であつたり、人に苦しみを与えるものにもなっている。電気椅子という人を死に誘う道具に対して、ウォーホルが「死の形而上学」の一つの究極として目を向けた。これも「アブソリュート・チェア」と呼べる存在だと思うんです。

こうしたシンボリックな作品を頂点に置きながら、椅子の様々な振幅あるいはコノテーション(含意)を見直してみようというのが「アブソリュート・チェアーズ」展の目的です。機能する椅子、用の美としての椅子ということと、今回の展覧会の文脈における椅子というのは、全く対極的なところにあります。

—現代美術のなかで椅子はどのような意味を持つのでしょうか？

建島 椅子には制度的な意味があつて、社会的な階層や秩序を象徴しますよね。会社では社長の椅子と新人の椅子は大きさが違うわけですよ。それは楽だからとかじゃなくて、えらく見せるためだったりする。機能で分けているわけではなくて、ヒエラルキーのためにやっているのがコミカルな感じがします。これは椅子が持っている度し難い階層のシンボル性であつて、椅子のなかに暗黙のうちに入り込んでいる。こういった椅子が孕むコノテーションを、いろんな人たちが風刺的に、また挑発的に使ってきました。

それから身体性や性的なメタファーということがありますね。椅子は腰掛ける場所だけれども、そこに発する官能性のようなものが意識されている。草間彌生の《無題(金色の椅子のオブジェ)》(図3)には、メタリックな塗装をされたファルスがびっしり生えています。シュルレアリスムのなグロテスクなイメージでもあるし、日常的な椅子が使われているという面ではポップ・アートのでもありますね。これには草間さんの意図とは別にいろんな解釈を加えることができます。例えばフェミニズム的な解釈だと、椅子は旧来の価値観では女性の場所とされてきた家庭に置かれるものであつて、男性原理によって支配されている。ところが彼女はそれを支配するものを支配し返しているというわけです。

椅子は生活に密着しているものですよ。美術作品になつても、我々は椅子に日常性を感じる。それを逆手に取った作品もあります。高松次郎の《複合体(椅子とレンガ)》(図4)は、日常的で身近な事物の機能を奪ってコンセプチュアルな理論装置の中に組み込むということをやっています。どこにでもあるシンプルな椅子をレンガの上に乗せて、ちょっと傾けただけ。それだけでもって存在の態度自体が剥き出しにされるんです。じゃあ電話機でもいいですかという話ではない、椅子でなければならぬ。日常的なものだからこそ、その機能性から疎外されたときに概念主義的なものへと転換する。誰でもできそうであるけれども、誰もやっていない。非常に鮮やかでスリリングなトリックだと思います。

—最後に来場者へのメッセージをお願いします。

建島 「アブソリュート・チェアーズ」は、週ればデヴィッド・ボウイの曲のタイトルである「アブソリュート・ビギナーズ」という不思議な言葉に触発されたタイトルです。ボウイは非常に優れた語感を持った人なので、その言葉を何とか借りられないかと思ったんですね。だから「アブソリュート」という言葉からそれほど深い意味を汲み取っていただかなくてもいいんです。

日常的な椅子とは違った、椅子の極端なあり方、逸脱したあり方の中に、我々が持っている発想を揺さぶるものがある。ただ椅子は椅子ですから、難解なものではなくて、身近なもの、面白いものとして見ていただければいいんじゃないかという期待もあります。岡本太郎の《坐ることを拒否する椅子》に座ってもらったりしながら、なんて珍妙な椅子なんだとか、こんな逆説的な使い方があるんだとか、そんな形で気軽に楽しんでもらえたらと思います。(聞き手:S.A.)



(図1)



(図2)



(図3)



(図4)

(図1) マルセル・デュシャン《自転車の車輪》1913/1964年 京都国立近代美術館 ©Association Marcel Duchamp/ ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2024 G3417
(図2) アンディ・ウォーホル《電気椅子》1971年 滋賀県立美術館
©2024 The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc./Licensed by ARS, New York & JASPAR, Tokyo G3417
(図3) 草間彌生《無題(金色の椅子のオブジェ)》1966年 高松市美術館 ©YAYOI KUSAMA
(図4) 高松次郎《複合体(椅子とレンガ)》1972年 ©The Estate of Jiro Takamatsu, Courtesy of Yumiko Chiba Associates